東医大誌　**64**(3)：229-241, 2006

医　学　史

東京医学専門学校開校をめぐる群像

友　田　燁　夫
Akio TOMODA
東京医科大学　生化学講座

はじめに

東京医科大学開校80周年の記念式典が1996年11月17日にとりおこなわれ、この日にあわせて復刻版『奮闘之半年』(図1)[1] が出版された。この『奮闘の半年』とは大正5 (1916) 年5月に当時の日本医学専門学校学生400余名が総退学し、東京医科大学の前身である東京医学講習所（のちの東京医学専門学校）を苦難の末、創立に至らしめた経緯を学生自身によってありありと記録された日誌である。この中に大正5年9月11日の東京医学講習所開講式において披露されたと思われる創設者、顧問、教授の一覧表が含まれており (表1)、顧問として医学博士・中浜東一郎、医学博士・男爵佐藤進、医学博士・文学博士森林太郎の名前が見られる。森林太郎の名前が出てくるのはこのとき限りである。『奮闘之半年』の本文中には顧問は中浜博士と佐藤博士と記載されており、森林太郎の名前はどこにもでてこない。この点が筆者にとって大きな疑問であった。森林太郎とは文豪森鴎外のことである。また森鴎外と中浜東一郎は、東大医学部の同期卒業生であり明治から大正にかけていろいろな意味においてわが国の医学界に影響を与えた人達である。順天堂の佐藤進男爵が日本医学専門学校学生団を応援し、佐藤進の嗣子である佐藤達次郎が東京医学講習所および東京医学専門学校の初代校長となったことは良く知られているが[2-4]、森鴎外や中浜東一郎が本校の開校に尽力されたことは、これまで十分に伝えられていなかった。

ところで、東京医学専門学校の前身である東京医学講習所設立は学生が総退学した大正5年5月15日から2ヶ月で文部省の認可に至っており、しかも文部省は6月上旬までは中々重い腰を上げなかったことから、その経緯は大きな謎である。慶應義塾大学が同年の7月に医学部設立の趣意書を文部省に提出してその年の12月になって医学部創設が認可され、その創立は翌年であったことと比較するならば、ここに何らかの大きな力が働いたことを想像してもおかしくない。医学専門学校を創設する以上、財政的な裏づけはもちろん、専門の教授陣、校舎、専門学校付属病院の確保などが、難問として残っており、これらは学生の力では如何ともしがたいことであった。また、5月の段階から学生の保証人として活躍した大角桂厳、6月に発足した学生支援のための後援会の責任者、高橋琢也、寺尾亨、福本誠 (日南)、秋虎太郎ら、5名の方々が東京医学講習所さらには東京医学専門学校の開設に奔走されたことは紛れもない事実であるが、医学の世界からは程遠い方々ばかりである。東京における医学界の強力な応援がどうしても必要であったと考えられる。これらの疑問については東京医科大学五十年史[2]、同七十年史[3] や原三郎著・東京医大50年の歩み[4] からは十分に答えを得ることができない。東京医科大学の開学を考えるうえで、大正5年当時の医学界の状況や森鴎外、中浜東一郎、緒方正規、佐藤進、石黒忠悳、北里柴三郎、青山胤道らの医学界における連綿たる繋がりまで敷衍させることは無駄ではないと思われる。

2006年2月27日受付、2006年3月2日受理
(別冊請求先：〒160-8402　東京都新宿区新宿6-1-1　東京医科大学生化学講座)

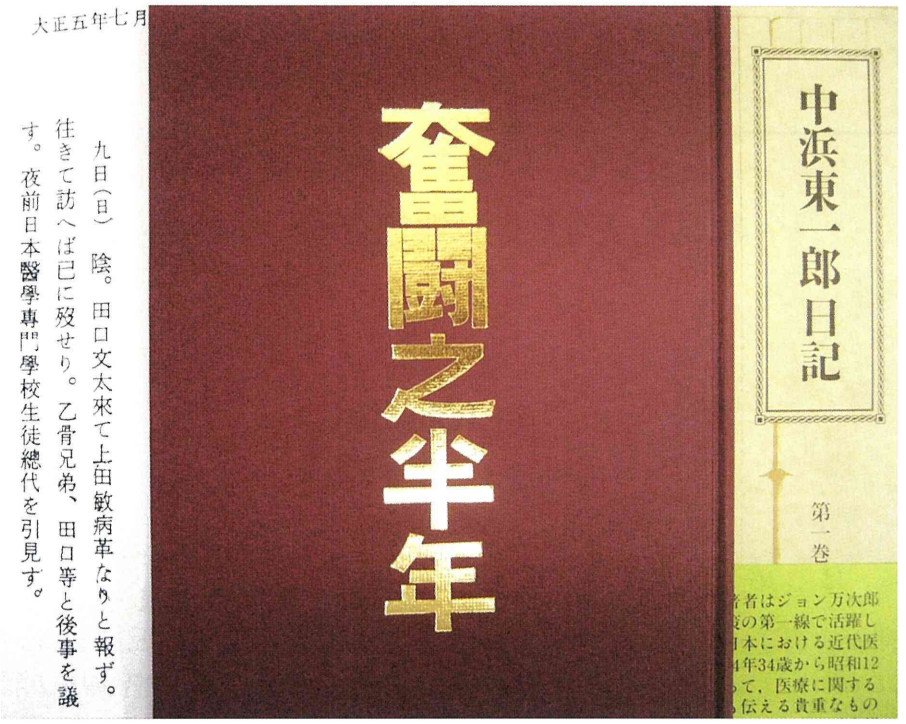

図1　復刻版『奮闘之半年』、中浜東一郎日記の表紙、および森鴎外日記の大正5年7月9日の部分（岩波書店版より）

筆者は昨年の暮れに千駄木の森鴎外記念図書館(旧観潮楼) を訪れ、鴎外の大正5年前後の日記 (図1)[5] に触れる機会を得、日本医学専門学校学生について記述した次の一文に接した。「6月10日：夜前日本医学専門学校学生島根県人太田隼知、河野正夫を引見す。」

開校90周年を迎える今、森鴎外の晩年のある日の出来事から発したと思われる東京医学講習所開講への2ヶ月について想像をめぐらせるとともに、『奮闘之半年』にかいまみられる当時の学生の毅然とした逞しいエネルギーに共鳴するものである。また、森鴎外記念図書館で中浜東一郎日記 (図1)[6] を紹介してもらったことから、ジョン万次郎の長男である中浜東一郎博士が東京医学講習所の開講とその後の発展に大きく関わっていたことも分かった。

本稿では、『奮闘之半年』にまとめられた紛争の経緯を要約するとともに、森鴎外日記や中浜東一郎日記から、東京医学講習所開講までの数ヶ月の足跡をたどってみたい。また、設立者の一人である寺尾亨と学生後援会発起人である頭山満ら、中国辛亥革命やインド独立運動と関わった方々[7–9] の東京医学講習所開講支援についても寸描してみた。

紛争の発端

『奮闘之半年』によると、日本医学専門学校は済生学舎より分離して明治45 (1912) 年7月10日に設立されたとある。済生学舎は長谷川泰により明治8 (1875) 年創設された医学校であるが、明治末期になって経営が悪化し、いろいろな問題が山積されていた。済生学舎は結局、山根正次によって日本医学専門学校として引き継がれる。日本医学専門学校は第一回学生が入学した大正元年当初より経営状態は悪く、校舎や種々の設備は貧弱であったことが、『奮闘之半年』にも記載されており、私立医学専門学校指定規則からは程遠い状況が続いていた。これらの経緯は唐沢信安による『済世学舎と長谷川泰』[10] に詳述されてある。日本医学専門学校に入った学生達には、卒業時までに医師国家試験の無試験指定を得ることを山根理事長の部下の磯部検三理事によって約束されていた。しかしながら、それは単なる学校側の口約束で、文部省からは無試験合格の指定校としては認可がおりなかった。卒業を控えた学生達はこの点の改革を求めて紛争を開始した。大正4年12月のことである。学生らは血判状でもって、団結して難事にあたることを誓った。

ストライキ突入とその後の経緯

学生達は山根正次理事長と磯部検三理事の辞任を要求する闘争から始まった。これが、翌年大正5年4月末まで続く。学生団によるストライキは5月1日(月) より新しい局面を迎える。その日の学生集会で、新1年生は血判連署して学生団に加ったが、そこで決議されたことは、1. 山根、磯部両氏の本校との関係を断つ。2. 問題解決まで同盟休校とする。3. もし犠牲者が出た場合は全校生徒がこれに殉ずること、であった。そして日本病院までデモをおこない、それが夜半まで続いた。5月2日には、嘆願書を作成し、血判状とともに文部省へ上申することを決議している。以下『奮闘之半年』より、活動記録を抜粋してみる。

5月3日 (水)　高田文部大臣への嘆願書を作成し、全生徒連盟血判して文部省を訪れた。大臣不在のため、学生委員8名が福原次官に面会し、嘆願書を提出した。

5月4日 (木)　学校側より、退学処分13名、無期停学処分23名の掲示があった。午後5時より保証人大会を開く。保証人には大角桂厳、奥宮衛(海軍少将) が加わっている。

5月5日 (金)　保証人委員会は牛込区砂土原町の土佐協会で開かれた。学生らは委員会の結果を聞くため午後6時に (旧制) 第一高等学校横の西教寺に集合。

5月6日 (土)　朝6時半に、第二教室に集合し、大角桂厳委員の報告を聞く。夕方6時に日本医学専門学校教授の参集を乞うが、学校側の妨害があり9時に14名の教授が集まる。教授らは学生に同情し、援助を与えることを述べる。

5月7日 (日)　学校は閉鎖され、学生の会議は根津の演芸座で行われた。決議事項としては、前日の教授会に出席していない教授を訪問し同情を求めること、など6項目であった。

5月10日 (木)　天谷千松学校長名で紛争を起こした学生を糾弾する書面が父兄に送られる。

5月11日 (金)　8時20分、学生大会。大角が保証人委員会の報告を行う。この日、学校側は授業を再開し、5名の登校者があった。午後7時に保証人大会が、青年会館で行われた。奥宮 (海軍少将) 委員長を座長とし、学生保証人である大野晩睦 (のちの自民党代議士) らが熱烈なる演説を行う。保証人と学生は一致団結して本問題の解決を目指すことを決議。

表1　東京医学講習所の開講式における顧問、設立者の一覧

顧問	
醫學博士	中濱東一郎
醫學博士	佐藤進
男爵	
醫學博士	森林太郎
文學博士	
設立者（東京醫學專門學校創立委員）	
東京醫學專門學校創立委員長	大角桂巖
東京醫學講習所監督	正四位高橋琢也
	福本誠
法學博士	寺尾亨
東京醫學講習所主幹	秋虎太郎
臨床講義	
外科臨床講義	本郷順天堂病院
内科臨床講義	麹町回生病院
學生數	
卒業受驗生	四拾貳名
四學年	八拾八名
三學年	壹百壹名
二學年	六拾九名
一學年	壹百拾八名
合計四百拾八名	

5月13日 (土)　大隈重信首相に上申するため、官邸を訪れるが不在とのことで、上申書と血涙録を提出。

5月16日 (火)　午後6時に本郷中央会堂で第二回学生・保証人大会を開催。奥宮保証人から、土佐協会内に設立された保証人委員会での決議では、1. 文部省の意向を確かめること、2. 資金調達を行うこと、3. 学校幹部の改造を求めること、などであったが、磯部、山根理事が保証人会に出席しないためこの案は不調におわった、と報告された。これにより、学生は**同盟退校することを決議する**。大角保証人もこれを支持する演説を行う。この段階で、学生と学校側とは完全に袂を分かつことになる。

5月17日 (水)　学生らは、現況を広く社会に訴えるために、公開演説会を開催することとし、また弁士としては各県出身名士に依頼することを決定。

5月18日 (木)　神田青年会館にて第一回公開演説会。聴衆は1,000人余り。演説者：森川国南 (20世紀社長)、大野伴睦 (東京弁論社記者)、金原善三郎 (曙新聞社長)、青柳有美 (実業の世界社)、伊東知也 (代議士)、大角桂厳 (弘道館)、立岩駒吉、土屋清三 (日本医界社) ら9名。ジャーナリストが多くみられる。この間、大角桂厳が学生団の支援の支柱となっていたと考えられる。

5月21日 (日)　午前9時20分に集合し、1. 学校財団を確立すること。2. 確実な他の学校に (学生を) 継承させること。3. 学校の処置に対し文部省に責任を負わせること、などを骨子とする後援会趣意書を決議。文部省を訪問し文部大臣に会見する場合、学生から委員10名を選んで会見に臨むことを決議 (保証人は会見に加わらない。)

5月22日 (月)　文部大臣に会見した学生委員から、文部大臣は「一度学校に帰って善後策を講ずるのが最良である」と述べたことが報告された。

5月24日 (水)　午後5時、神田青年会館にて第二回公開演説会。弁士は前回とほぼ同じ。

5月26日 (金)　私立日本医学専門学校より「本校第一回卒業試験を6月15日から行う。6月5日までに、卒業受験料を納入し、今回の試験を受けなければ次回は資格はない。」との通知書が学生宛に届く。

5月30日 (火)　夕方5時。第三回公開演説会。弁士は前回とほぼ同じ。解散は12時ごろ。

5月31日 (水)　後援会長より、頭山満翁以下、23名が後援会に参加する旨の報告。奥宮氏は後援会より脱会する。今後は学生団による調査と協議は軍隊式で命令伝達を秘密裏に行うことを決議。学生団報第二号を発行配布。

6月2日 (金)　後援会相談会を開催することを決議し、頭山満翁を発起人とすることを希望する。後援会係の学生に各県人会の学生もこれと共同して後援者との折衝に尽力することを決定。

6月6日 (火)　学生会議は午前9時に開催。後援会会員による活動が盛んである旨を報告。また、「各県人会の学生は出身の名士を訪れ、境遇を陳情し同情を求めて吉報をもたらすこと頻なり」と報告されているとともに、埼玉県人として本田忠雄博士、渋沢基次 (渋沢栄一の子息) を訪問したことが述べられている。さらに「秋虎太郎と大角桂厳が島田衆議院議長を訪問したこと、福島県人会学生が東大総長である山川健次郎を訪問し、学生の境遇には大いに同情し、その行動について研究中であることを言わしめた」などの報告あり。

文部大臣と会見した学生の話として、「学校側より具体的案の提出があるまでは学校および学生へ干渉することは出来ない。また、あくまで学生が決心固く復学しない場合は、第三者が出てこなければ本問題は解決できないであろう」と。文部省には毎日3名の学生委員を訪問せしめることを決議。

6月7日 (水)　文部省を訪れるが、文相には会えず、秘書課長に面談したと報告あり。次の公開演説会は6月8日とした。学生県人会に主任をつくることを決定。

6月8日 (木)　前日、緒方博士 (緒方正規博士または緒方知三郎博士) を訪問したことが報告される。会議は翌日からは菊岡亭に決定。保証人である諏訪が大角と感情的に対立し学生がそれを鎮撫したとある。本郷大和座で公開演説会開催。新たに向軍次 (慶應義塾教授) が弁士として加わる。聴衆は1,000名余り。

6月9日 (金)　根津菊岡亭にて会議。本日の文部省

訪問委員の選定を行なう。また各教授訪問の件は否決となる。会議の会場は翌日より本郷鈴本亭となる。

6月10日（土）　文部省訪問の学生の報告では、安部局長と会見したが「要するに学校さえ良くなれば学生は幸福であるから、磯部、山根を残していいだろう」といわれた由。明日は日曜であるので、文相、次官、局長、参政官、副参政官の各私邸を訪問することに決定。島根県人会の学生2名はこの日の日暮れ時に森鴎外を訪問することになるが、『奮闘之半年』には記述されていない。

学生の森鴎外邸訪問について記述する前に、鴎外が東大医学部卒業後に関わった脚気問題について触れておく。

森鴎外と脚気問題：山根正次との接点

明治維新が成立し、日本の政府が安定してきた明治15～16年に、陸軍、海軍両者に医務局が設置された。その当時脚気は日本の社会では大きな問題となっていた。とくに、海軍の練習艦が長期遠洋航海途中に、脚気患者が続出する状態であった。海軍医務官の高木兼寛はイギリスに留学した新進気鋭の医師であった。彼は西洋では脚気が少ないことに着目し、日本における脚気の蔓延は白米を主食とする食事に原因があるのでないかと疑った。そこで練習船「筑波」を利用して、オーストラリア、ハワイ航路を経る巡洋航路で白米を止めパンや肉を主体とする洋食に切り替える方法を採用した。その結果、脚気患者はほとんど出なかった。高木のこの考えは少しずつ海軍に浸透し、最終的には海軍は麦飯を採用することとなった。日清戦争や日露戦争における海戦での勝利は一面では麦飯導入による脚気の撲滅が大きかったといわれている[11-13]。

一方、陸軍省ではドイツ人医師のベルツ（Baelz, 1985. 1. 13～1913. 8. 28, 東大教授）の「脚気は細菌感染によっておこる」という考えを取り入れ、高木の食事説を否定してしまった。このことが日清戦争や日露戦争まで尾を引くことになる。発端は緒方正規（のちに東大医学部衛生学教授）が、1886年に脚気菌を発見したと報告したことであった[11-14]。当時の陸軍医務局長であった石黒忠悳はその考えをつよく支持したことから、陸軍では白米を主体とした食事を取り入れることとなった。その結果、陸軍では脚気患者が減ることはなく、日清戦争では4万人もの患者が続出し、死亡者は4千名を越えたといわれる。日露戦争（明治37年～明治38年）では陸軍兵士の25万人が脚気にかかり、3万人近くが脚気で死亡したといわれる。

緒方が脚気の細菌説を発表した当時、ベルリンのコッホ研究所に内務省医務局より留学中の北里柴三郎（緒方より3年遅れて卒業）は緒方博士の論文に異を唱え、脚気の原因菌は存在しない旨論文をドイツの雑誌に報告した。コッホのもとで破傷風菌の発見など、世界的な研究業績を挙げて帰国した北里を待っていたのは、緒方や石黒を巻き込んだ東大医学部学派のすさまじい反論であった（表2に脚気論争と関係した東大医学部学派の人達の卒業年次を示す）。

森鴎外は北里と同様にベルリンに留学しており、北里に遅れて帰国する。ところが鴎外は猛然と緒方説を支持し、北里柴三郎や高木兼寛の考えを否定するキャンペーンを行なった[11-14]。慶應義塾の福澤諭吉は窮地に陥った北里に救いの手を延べ、東京白金に伝染病研究所を明治27（1894）年に設立する。この伝染病研究所は明治32年には内務省管轄となって、北里は内務省より出向することとなった。森鴎外や石黒は文部省や時の総理大臣である大隈重信に働きかけて、大正3

表2　脚気論争と関係した東大学派の人々および同級生の卒業年次，石黒忠悳，高木兼寛のプロフィール（*脚気細菌原因説の支持者，§脚気食物原因説の支持者）

明治13年卒（第2回生）	明治14年卒（第3回生）		明治15年卒（第4回生）	明治16年卒（第5回生）
*緒方　正規	*森　鴎外	*小池　正直	*青山　胤道	§北里柴三郎
小金井良清	中浜東一郎	賀古　鶴所	§山根　正次	

*石黒忠悳（1845～1941）：西洋医学所に学び，のちに大学東校の少助教となる。1890年に陸軍軍医総監。1895年に男爵。

§高木兼寛（1849～1920）：薩摩藩の出。鹿児島医学校で英国人医師・ウィリスに医学を学び，英国のセント・トーマス病院に留学。1880年に海軍中医監となった。1881年に成医会講習所（のちの慈恵医科大学）を設立。1885年，海軍軍医総監。1905年に男爵。

(1914) 年に伝染病研究所を文部省管轄としてしまった (のちの東大医科学研究所)[11]。その年に北里らによって北里研究所が設立され、慶應義塾大学医学部の前身となった。

脚気論争は当時の日本の医学界を巻き込んだ大きな事件であったが、この論争は明治19年 (1886年) から20年以上にもわたって展開された。結局、高木兼寛や北里柴三郎らの考えが正しいことで決着した。日露戦争終了後に山根正次衆議院議員 (1857～1925. 東大医学部卒、森鴎外の1年後輩で、青山胤道と同級。衛生行政のパイオニア) が脚気病調査会の設立を求める議案を国会に提出し[13]、森鴎外、石黒忠悳、青山胤道らの脚気細菌説支持グループに大きな打撃を加えることとなった。また森鴎外とは『医海時報』という雑誌で対峙し北里を応援した山谷徳治郎を、山根正次は支援した。のちに山根正次は日本医学専門学校の理事長として就任することとなる。

島根県人会学生の観潮楼訪問

鴎外はかっての上司であった石黒忠悳に陸軍軍医総監の職を辞すことをしばしば申し入れていたが、なかなか認めてもらえなかった。大正5年4月になり、やっと陸軍医務局を退職している。鴎外の住居は日本医学専門学校 (千駄木) の目と鼻の先である。当時、小高い千駄木の岡から東京湾が遠望できたことから、鴎外宅は観潮楼と名づけられていた。日本医学専門学校のストライキは鴎外の真近で起こった事件であり、状況は手に取るようにわかっていたと思われる。

鴎外の日記に**大正5年6月10日 (土)**、「夜前日本医学専門学校学生島根県人太田隼知、河野正夫を引見す。」とごく短く書かれてある。『奮闘の半年』によると、6月はじめより、学生団は学生による各県人会をつくり、その世話人として県人会主任を置いている。学生らは県人会を中心に行動し、手分けして県の有力者を訪問し、窮状を訴え始めている。広島県人会では前沖縄県知事であった高橋琢也を訪問し、全面的な応援を取り付けている。福島県人会では、東大総長山川健次郎の協力の確約をとっている。埼玉県人会は本田忠雄博士を訪問し、また茨城県人会は隠居中の佐藤進男爵を訪問している。このような県人会の活躍については、前述のように『奮闘之半年』に記載されている。しかしながら、島根県人会の学生が森鴎外を訪問したことは『奮闘之半年』には一言も触れられていない。

鴎外は大正5年4月に陸軍軍医総監を辞したが、文筆活動では『渋江抽斉』[15] を5月に完結し、文壇では大きな評価を得ていた。島根県人会の太田隼知、河野正夫は、巨魁・森鴎外を決死の覚悟で訪問したのではないだろうか。しかしながら、鴎外は同郷の青年らを暖かく迎え、日本医学専門学校の状況を良く聞き、全面的に応援することを約束したのではないだろうか。この背景には前述の脚気論争で鴎外や石黒男爵に手痛い打撃を与えた山根正次理事長によって窮地に立たされている学生団に対して深い同情があったことが推察される。鴎外は学生を心情的に応援するが、決して自分の存在を口外しないことを太田、河野らに約束させて、帰したのであろう。日記の内容から、島根人学生の訪問は、鴎外にとって重要な出来事であったと考えられる。

6月11日以降の学生会の日誌を以下、要約してみる。

6月11日 (日)　午後1時開会。文部大臣訪問委員の報告。秘書官曰く、「廃校は易しいが、君たちの損だろう。むしろ第三者を探るのが一番である。また、官立学校への学生の分配は難しい。」と。また、福原文部次官曰く、「学生達は授業を受けながら磯部を排斥すればよい。学校側も一生懸命やっているようだ。無試験指定校になると断言した言葉を出した磯部が悪い。文部省は指定条例に適合しなければ、無試験指定は断じてない。青山 (胤道) 博士のいっている官立学校への分配も不可能である。君たちは実力あれば名誉ある国家試験を受けたら良い。」と。学生はそれを拒絶し、あくまで目的を遂行しなければ、如何なる提案にも賛成できないと答えた。翌日夕方に後援会懇談会を万世橋ミカド倶楽部で開くこととなり、会員諸名士に招待状を送る。4時半に散会。

6月12日 (月)　午後1時開会。今晩の後援会諸名士招待会に学生団から委員会委員と団員若干名出席させることを可決。文部省訪問委員 (迫田) の報告で、文部大臣曰く、「後援会の成立および性質は文部省の預かり知るところではない。君たちおよび学校に対して利益になれば採用すべきである。」と。

この日、文部大臣は後援会について言及していることから、何か大きな変化がおき始めたことを推測させ

る。森鴎外が前日の6月11日より具体的に支援活動を始めたのではないか。この晩にミカド倶楽部で後援会の会合があった。

6月13日（火）　午前10時開会。学校側の後援会が学生代表5名を呼び、「山根、磯部理事を残し、退学、停学処分の取り消しを条件として帰校すること」という案件を提出したが、学生側は却下したとのこと。

昨晩のミカド倶楽部における後援会相談会の内容の報告があった。それによると、31名の来会者は、斉藤東京府会議長、高橋前沖縄県知事、寺尾博士、向軍治、茅原崋山、秋虎太郎、笠原文太郎、その他有力家であったとのこと。第一回の会合であり具体案はなかったが、楽観して良いとのことであった（ここで初めて、高橋琢也や寺尾亨の名前が出てくる。発起人の頭山満は寺尾亨に託したと考えられる）。

6月15日（木）　午前10時開会。報告事項として「後援会はある具体案に向かって進行中であり、安心せよ。」とのこと。

この日に新たな展開が表面化してきたと考えられる。ここ一週間で劇的な変化が見られている。

6月20日（火）　午後1時開会。文部省報告で、「局長に面接したが、斉藤府会議長の妥協案について上申した。」また、局長の言として、「自分としては決して磯部には同情しない」と。

6月25日（月）　午後1時開会。文部省訪問報告。高田文部大臣曰く、「学校側より具体案は出ていない。学生側後援会の案を待つ。卒業試験の是非は調査する。現在のところ、文部省としては方法がない。名士の助力を傍観するだけである。学生達は日本医学専門学校の廃校を求めているが、これまで認可取り消しの例はない。」と。

6月26日（火）　午後1時開会。注意事項として、「各種の風説に迷わされず、後援会を信じて団結を固くすること」「磯部は新聞その他に画策して、団結を撹乱し、父兄の不安を招くよう運動している」と報告があった。中本富太郎会計係は本富士警察署に呼ばれ、会計の取調べを受けたことを報告。

7月3日（月）午前9時開会。報告事項「明日後援会の有力な人たちがこの会場（根津菊岡亭）に臨場するが、全学生より委任状の提出を受ける必要があり、各学生は2銭収入印紙と認印を持参すること。」

7月4日（火）　午後1時開会。本日は最も重要な日であるので、会場の出入り口は、学生の調査委員で警戒したとある。委任状を各学生に渡す。委任状の内容は次のようなものであった。

委任状

今般大角桂厳、高橋琢也、福本誠、寺尾亨、秋虎太郎の五名に対し左記事項を委任す。

1. 日本医学専門学校に於いて磯部山根両理事を排除したる時は復校に至る一切の処置
2. 前項の目的を達せざる時は後援会者新経営の医学専門学校入学の手続きをなす事
3. 前項の学校設立せられる時其の事後を問はず適宜の時期に日本医学専門学校の退学願書提出する事
4. 右の外不利に陥らざる為めに臨機の処置をなす事

大正5年7月　　日

原籍

現住所　　姓名

また、学校側の後援会からの仲裁案（斉藤孝治、関幸太郎の連名）の書状が配られたがこれを却下した。ここで休憩がとられた。そこに、高橋、大角、秋、寺尾、福本の5名士が登場する。『奮闘之半年』では、「自動車の響するよと見る間に高橋、大角、秋、寺尾、福本の五先生来場せられ、議長の紹介、謝辞ありて後諸先生は壇に立たる。高橋先生、白髭を胸に垂れ慈父の如き温顔にて、…云々」という名文で表現されている。壇上では高橋琢也、秋虎太郎、寺尾亨、福本誠、大角桂厳の順番で話しが進む。そして、「四百余の学生の瞳には露を宿せり。感謝の涙なり。誰人が感奮せざらん大海に漂うこと六十余日、苦心空しからず、破船を捨て鉄艦の救網に頼らんとす。各自の胸には電流の如く伝わる安心とそれに伴う責任を感じ暫くは神聖なる殿堂の如く会場を緊張せしめたり。」と続く。

7月9日（日）　午前九時、協議事項として「散会後在京する各県人会主任の外に各級より代表者

若干を残すことに議決」したとある。十一時散会。

この日の夕暮れに学生総代・中本富太郎が森鴎外を訪問する。鴎外の日記には「陰。田口文太　来て上田敏病革なりと報ず。往きて訪へば已に没せり。乙骨兄弟、田口等と後事を議す。夜前日本医学専門学校生徒総代を引見す。」と記されている。その日は親友上田敏が逝去して慌しい1日であったと思われる。にもかかわらず、日暮に総代の中本富太郎（鳥取県出身）と会見している。『奮闘之半年』の中で、7月9日および10日前後の日誌ではとくに鴎外訪問について記載はない。中本は鴎外にそれまでの尽力に感謝の意を表するべく、また開講にむけて教授の人選あるいは文部省提出のための設立趣意書（設立者、顧問、講習所などの記載が必須であったと考えられる）の作成を依頼するために訪問したのではないだろうか。鴎外と中本とのあいだに何が話されたのかは不明である。

中浜東一郎の日記では7月13日に初めて日本医学専門学校に関する一文が散見される。「7月13日。終日小雨。深川門前仲町伊藤半次郎氏方に往診。旧日本医学校生徒の為に学校新設するに付き、有志者両国の某亭に会す。予も本日始めて之を知りたるか為出席するを得ず。中央衛生会特別委員会を開く。予出席」とある。中浜は後援会の一人として名簿に載っているがこの段階では深く関わっていないと思われる。

7月14日（金）　午前9時開会。「明日および明後日にわたり、重要な報告があるので必ず出席すること」と報告される。昨日の後援会会議の結果が学生幹部に伝えられたと考えられる。

7月15日（土）　午前9時開会。今後は後援者にすべてをまかせ、学生会議は休会することを決議。10時5分に至り、高橋、寺尾、福本3先生来場。高橋琢也の話に続き、寺尾、福本の話があり、新しい医学専門学校が設立されることが説明された。学生団の喜びで会場は興奮の渦であったようである。「議長ここに散会を宣し、天皇陛下万歳三唱、学生団万歳三唱」とある。さらに、「拍手裡に全員解散時に午前十一時二〇分、かくして吾光栄ある学生団はついに休会となりぬ。遂に識者の同情となり後援会の名士によりて血潮の花は実を結び学生始め関係者の等しく歓喜の内に目出度この夏を過ごさんとす、快なる哉。」

この時点で文部省は医学講習所の設立を認可し、また将来に医学専門学校を認めることを確約したといえる。7月16日からは9月の開講に向けて準備が進む。

8月19日の中浜東一郎日記には「細雨終日霏々　高橋琢也氏来訪。」とあり、高橋琢也が開講に向けて相談に来たことが伺える。

8月24日（木）　午前9時半開会。主任の手より「通告第一」を団員に発達する。

通告第一
拝啓、予ねて申進候学校の儀着々と進捗し校名を私立東京医学校と称し本校を東京牛込区神楽町二丁目二四番地東京物理学校内に仮設し来る九月十一日より開校授業致候に付き不取敢この段及御通告候也。　大正5年8月23日
大角桂厳、高橋琢也、福本誠、寺尾亨、秋虎太郎

9月6日（水）　午前9時開会。「男爵佐藤進、医学博士中浜東一郎両氏が顧問になることの快諾を受け、佐藤達次郎博士が教務上一切の準備を行い、教授も全部決定した」ことが告げられた。

9月8日の中浜日記では「晴。夜に入り、博士佐藤達次郎君来訪。旧日本医学校生徒に対し、来十一日より講義を開くことを告げ、明後十日神田タカラ亭にて講師の集会を催ふし、受持ち時間を定むる筈なりと云ふ」とある。

9月9日（土）　午前9時開会。ここで、後藤議長の宣言により学生団の解団式が行われた。

9月10日の中浜日記には「日曜日。晴。夕淡路町多賀羅亭にて、医学講習会時間割を定め、夜食を共にす。予も出席し、八時過の汽車にて鎌倉に行き一泊。」とある。

9月11日（月）　午前8時より東京医学講習所大講堂で始業式を挙行。8時半より、大角桂厳、秋虎太郎、佐藤達次郎、高橋琢也、福本誠の順で

挨拶と祝辞がなされ、最後に学生総代の中本富太郎が答辞を読んだ。午後 1 時より向島のサッポロビール園で懇親会が盛大に行われた。

学生が目標とした専門学校設立認定は大正 7 年 4 月 11 日に、また無試験開業指定はさらに 2 年後の大正 9 年 4 月 13 日になって文部省より認可がおりたのである。

鴎外は 6 月 10 日以降、東大医学部の人脈や文部省の人脈を最大限に活用し、文部省の東京医学講習所の新規設立認可と新しい学校の教授陣の確保について全力を傾けて動いたのでないかと考えられる。中浜東一郎は鴎外の医学部同級生であるし、緒方正規は 1 年先輩であり、また石黒忠悳は陸軍医務局の上司であった。これらの人達は文部省に絶大な影響力をもっていた。このことは、大正 3 年に鴎外が石黒とともに文部省に働きかけて、北里柴三郎が所長を務める伝染病研究所を内務省管轄から文部省管轄へと移管させたことからも分かる[11]。6 月 11 日以降の文部省の学生団に対する急速な方向転換は十分に理解できるところである。

学生総代であった中本富太郎は講習所開講式で学生代表として答辞を述べている。中本は高橋琢也、秋虎太郎らの設立者の了解の上で、開講式で配られた設立者、顧問、教授の一覧表の中に森林太郎の名前をそっと入れておいたのではないだろうか。

その後、鴎外は病気がちで、「石見人森林太郎として死するを欲す」という遺言を親友の賀古鶴所に委託している。鴎外は東京医学講習所設立の 6 年後の大正 11 年に没した。鴎外は 10 歳で上京するまで津和野で幼年時代を過ごしたが、そこでは漢書 (四書、五経) の素読やオランダ語を学び、その後の鴎外を形作ることとなった。森鴎外は死に直面して、故郷の津和野で過ごした幼年時代に思いを馳せたのであろう。大正 5 年 6 月 10 日日暮れ時に訪れた日本医学専門学校学島根県人会学生 2 名に大きく共鳴したのではないだろうか。

おわりに

中浜東一郎は 9 月 11 日の開講式には出席していない。日記では「9 月 11 日。曇、小雨あり。昨日より南風強し。夕方帰京。」と記されている。9 月 12 日には「晴。夕方曇、冷気を催ふす。竹内作次郎来訪。午前中物理学校の医学講習会へ参観、開講は来る十五日なりと云ふ。帰路、高橋琢也氏を訪問し面会。」とある。中浜東一郎は淡々と東京医学専門学校の設立に関わっていたようである。森鴎外と中浜東一郎とは東大医学部卒業同期生であり、佐藤進らと共に日本医学会を創立している。鴎外日記と中浜日記からは、森鴎外と中浜東一郎が東京医学講習所の設立に関して連絡をとりあっていた様子は見られない。中浜東一郎は、東京医学講習所の内科学教授を引き受け、中浜の経営する回生病院は学生の内科学研修病院となった。その後、大正 6 年 9 月には、回生病院を東京医学講習所に譲渡している。

「9 月 9 日 (日曜日) 去る六日午前石黒忠悳氏(男爵)来訪、高橋琢也氏の依頼を受けて来れり。中浜は病院を八千円にて売却せんと云、高橋は六千円にて購はんと云ふ。依って七千円としては如何と述べられたれは予は七千円にて可なりと述へ、若し即金にて支払はざれば確実なる保証人を立つべき事を約束したり。」(中浜日記)。

ここで初めて森鴎外の上司で盟友でもある石黒忠悳男爵が回生病院の売却に関して仲介していることが明らかとなった。石黒も東京医学講習所と東京医学専門学校の開設に大きな支援を行なっていたことが分かる。

中浜日記では「9 月 18 日　晴。今午前回生病院を七千円にて高橋琢磨氏に売却することに約束し手附金千円を受けとる。」とある。

日本医学専門学校で起こった学生ストライキは当初は山根正次理事長と磯部検三理事の辞任を目的としたものであったが、次第に新しい学園を設立するという理想へと移っていった。それは大正 5 年が丁度大正デモクラシーが勃興していた時期でもあり社会的に受け入れられた。また、アジア各国の独立を支援するという頭山満 (学生後援会発起人)、寺尾亨らの理想主義とも重なっている。頭山らの支援活動は孫文の支援やインド独立の志士であるボースの「神隠し事件 (大正 4 年)」[9] などによって、辛亥革命の成立や戦後のインド独立へと繋がる。当時既に使われていた「自主独立」という言葉が東京医学専門学校の校是である「自主自学」の由来となったかもしれない。

東京医学講習所設立は学生団の整然とした団結によってなされたものであるが、その蔭には、「新しい学校を設立する」という目標を 6 月 15 日に具体的に学生団に示し、それを 7 月 15 日の文部省認可と、9 月 11

日の開講式という形で実現させた高橋琢也、寺尾亨、大角桂厳、福本誠、秋虎太郎そして頭山満の存在があったことを忘れてはならないであろう。また、森鴎外、中浜東一郎、佐藤進、石黒忠悳、緒方正規らの医学界の方々の応援が文部省を動かしたことは、今後、東京医科大学の史料室に所蔵されている史料を紐解くことによってより明らかとなると考えられる。

文　献

1) 東京医科大学同窓会編：奮闘之半年（復刻版）、1997
2) 東京医科大学同窓会編：東京医科大学五十年史。東京医科大学同窓会、1971
3) 東京医科大学同窓会編：東京医科大学七十年史。東京医科大学同窓会、1988
4) 原三郎：東京医大50年の歩み。東京医科大学同窓会、1966
5) 森鴎外：大正五年日記（鴎外全集）。岩波書店（絶版）、1989
6) 中浜東一郎（中浜明編）：中浜東一郎日記。冨山房書店、1995
7) 読売新聞西部本社編：大アジア　燃ゆるまなざし頭山満と玄洋社。鳥海社、2001
8) 井川聡、小林寛：人ありて－頭山満と玄洋社。鳥海社、2003
9) 中島岳志：中村屋のボース－インド独立運動と近代日本のアジア主義。白水社、2006
10) 唐沢信安：済生学舎と長谷川泰。日本医事新報社、1996
11) 土屋雅春：医者のみた福澤諭吉（先生、ミイラとなって昭和に出現）中公新書、1996
12) 板倉聖宣：模倣の時代（上巻、下巻）。仮説社、1988
13) 吉村昭：白い航跡。講談社、1994
14) 野村茂：北里柴三郎と緒方正規。熊本日日新聞社、2003
15) 森鴎外：渋江抽斉（鴎外歴史文学集）。岩波書店、2001

付　記

大正5年12月28日に発行された『奮闘之半年』のために執筆された高橋琢也と寺尾亨の檄文は古今に残る名文の一つであろう。

学生諸氏に檄す　　高橋琢也

災害と樹木と毛髪は日夜を分たず生長すとは油断を戒むる泰西の古諺なり。福は微より生じ、禍は忽より生ずるを常理とすれば人事は予め周到の用意を払ふにあらざれば成功を得ること難しとす。而も世人の多くは行事少しく緒に着けば忽ち楽観して成功の容易なるを過信するも其実適切の用意を欠きたるより中途にして破綻百出し忽ち蹉跌して一敗地に塗るるに至ること皆然り。蓋しその禍は叙上の如き人情普通の弱点に出づるものにして古人が成事は艱難の日に在り敗事は得意の時にありと教訓したるもこの欠陥を補はんとする婆心に外ならず、格言に曰く速来の幸福は速来の禍害と、また真理なり。旧日本医専の学生諸氏は修学中の苦況に悩まされ特に本年五月以来悲惨の境遇に陥りて一時廃学せざるを得ざるに至りたる等久しく悪戦苦闘をなしいたるが頃日聊か小康を得たるを以て前日の艱難を忘れざらんがため今回その奮闘の事蹟を叙して紀念号となし之を同志に頒たんとす。所謂前事を忘れざるは後事の師なり、諸氏のこの挙やまた同志間を益すること少々にあらざるべし。然りと雖も諸氏今日の境遇は果たして楽観を容すべきか、前途には何らの悲観すべきことなきか、是れ軽率に決すべき問題にあらず、諸氏現在の境遇はただ一時の小康を得たるに過ぎず、諸氏の前には尚一大難関の横たわることを自覚せざるべからず思うに諸氏は将来に成功の大望を抱き少なくとも所志の学業を成さんことを期するものなり。予をして露骨に曰はしむれば諸氏の中には漫然と目前の現象に安心して将来を楽観するが如き人あるに似たるもその実寸前暗黒にして宛ても五里霧中に彷徨するもという以て妥当なりと信ず。諸氏緊褌一番大に前途の難関を撃破せんことを覚悟せざるべからず。独逸の諺に曰く「凡そ人は二十歳前美麗ならず、三十歳前強壮ならず、四十歳前知能を得ず、五十歳前富貴を得ざれば最早終世挽回の途なきものとす」と諸氏はその美麗と強壮をは既に得たるも知能と富貴とに至りては之を将来に待たざるべからず　しかもその知能と富貴の二者は之を得ること容易の業にあらず、何ぞや凡そ天下の青年皆之を得んとし否独り青年のみならず老若を問はず男女を論ぜず苟くも立身出世の志望あるものは皆之を得んとして互いに社会の競争場裡に立ち必死に奮闘努力するを以てなり。

されば諸氏がこの競争に打勝ちて所志の目的を達せんとするには対手に百倍して活動せざるべからず、予は諸氏の前途に一大難関の横たわるを知るが故に諸氏が前途を楽観するは極めて危険なるを思はずんばあらず。諸氏の身上には前日の艱苦よりも寧ろ将来一層猛烈なるもの来襲するなきを保せず、否精神上には已にその難関に入りつつあり。諸氏は少なくとも之

を覚悟するを要す。而してその覚悟は他に依らず人を頼まず自主自立不撓不屈の精神を持って飽くまで難関を撃破して彼岸に達せんとするに在り而もその難関を撃破する唯一の武器は精神と信念となり、古人曰く万人と戦はんと欲するものは剣を用ふべからずと自ら信ずるところの念慮を有し十二分の精力を竭して戦う以上は天下何もにか之に敵せんや、諸氏幸にこの信念と精力とを以て各自運命の前途を開拓すべきなり。

学校新設の速進を祈る

法学博士　寺尾　亨

吾輩は日本医専問題勃発当初は、唯新聞紙上で見て居っただけであって、深くその真相を識るに由なく、加之、吾輩の学問とは全く違ったものであったから、深く意に介することもなくいわば路傍の人であった。然るに本問題の愈愈紛糾を極め、その停止するを測知するに難きに至るを見るに及んで、洵にわが教育界のため由々しき不祥事であると太く痛感して居ったのである。このときにあたり、一日該校学生の二三の者が突然来訪せられて本問題に関する実相を陳述せらるるところがあった。その学生というのは吾輩と同郷の者であって、何れも本問題に関して多大なる利害関係を有し、かつ傷心困憊その極に達し、しかも負笈遠く都に出てて盤根錯節茲に数年、志成るなくして如何でか父兄に見ゆるの面目やあるべき、願わくは一瞥の力を添えられたしと、赤誠溢るる若者の紅頬には涙潸然と止めもあへず語ったのであった。人生意気に感ず功名また誰か論ぜん其事の起始是非勧善は暫くこれを措き、斯く扮擾の結果、学生の前途を誤る事あらんを惧れ、つとに同郷者のためのみに非ず、四百有余の学生をして失脚の地位に立たしむるが如き悲運に陥らしむるを慮り、ここに吾輩がこれら学生の同情者として立つにいたったのである。

爾来、諸種の会合に引出され、そのつど種々の話を聞いたが、その間学生の為したる所些少の非難は　免れ得ざるを遺憾とするけれども、事茲に到る又止むを得ざる立場に居った事は深く同情に値すべき事であって、本問題の解決点もまたその処にあるべきを思ったのである。かくのごとくにして計らずも吾輩は本問題について深く関係することとなったのである。

自分は前述の如く、元来学問を異にして居るばかりでなく、他にも自分の管理せる私立学校があるので、微力到底充分なる貢献は為し能わざるところであって、新校設立ということについては、吾輩の如きものは如何に力を注ぐとも遠く及ばぬことであるから、四五の人がそれぞれその任にあたる事となって居るので、吾輩はそれに声援を与えて居るというに過ぎないのである。けれども、学生集合のたびに出席もし、また、同情者とも相寄り学生の事情については詳細を知っているが、この事件突発以来、最も困難なる時機にあたり、四百有余の学生は一致団結極めて強固に、しかもまた最初の誓約をあくまで遵守し、一人の豹変者をも見ざるがごとき、その友誼に厚きこれら四百の学生の心事に至っては、近時学生の風潮滔々子乎として、浮薄柔弱に流れやすき現代において、まことに学生界好個の覚醒剤というべきである。吾輩はこれまで、医学生といえば意気上らざる柔弱な者が多いということを聞いて居ったが、今次の事を見るにあたってその然らざるを実験したのである。

乍併、今や四百有余の学生はその母校を離れ、その前途や未だ充分なる到達点を見るに至らないけれども、これがために学生の気風崩壊するが如き事あるべからざるは今更云うまでもない事である。飽くまでこの堅忍不抜強固不朽の大気風を保持し、邁往勇進して行くならば、将来社会的大貢献をなすべき人物の輩出すべきは信じて疑わぬところである。依是観之、いわゆる「雨降って地固まる」「禍転じて幸となる」という如く、独り関係する学生諸子のみならず、今後において学生の好模範たり、学校の好模範たるべきを具備するならば、学界のため美しい花は永遠に咲き匂うであろう。ただ奈何せん、吾々は微力にしてその新なる学校設立に最も必要な資力において貢献する能わざるを遺憾とするのである。けれども今日においては同情者中の年長者たる高橋君が非常なる熱必と勇気とをもってその局にあたり、もっぱら斡旋して居られる事であるから、同君の至誠に依って世の有力者が之に動かされ、必ずや援助を与える人が多数に生じて吾輩の素志を貫徹せしむるであろうという希望に満たされて居るのである。

創設者のプロフィール

大角　桂厳　日本医学専門学校の学生保証人の一人。大正 5 年 5 月より、学生団を親身なって応援。講道館の加納治五郎の激励があったと『奮闘之半年』に記述されている。

寺尾　　亨　1859. 2. 1〜1929. 9. 15：福岡藩士の出。東大法学部教授。日露戦争の開戦を支持した東大 7 博士の一人。頭山満の盟友で、東京赤坂の住居は隣同士であった。寺尾寿博士（東京天文台台長、東京理科大学の創設者、校長）の弟。インド独立の志士であるラス・ビハリ・ボースの日本亡命を助けた。ボースは新宿中村屋にかくまわれ、日本国籍を得、インド独立運動を進める。また、ボースによって改良されたインドカレーは中村屋のカレーの原点となった。原三郎によると、寺尾邸に連れて行かれたときに、中国革命の志士である黄興と出会ったという（東京医大 50 年の歩み）。大正 12 年に没するまで、東京医学専門学校の理事を務めた。

秋虎　太郎　東京市市議会議員。東京医学講習所初代の主幹であり、病気のため、高橋琢也が引き継ぐ。

福本　　誠（日南）　1857. 5. 23〜1921. 9. 2：福岡藩士の出。「九州日報」の社長兼主筆。1908（明治 41）年 8 月 1 日から 295 回にわたって『元禄快挙録』を執筆連載。同年 12 月 14 日、博多聖福寺で第 1 回義士会を主催。原三郎の「東医 50 年の歩み」に「気持ちの上で赤穂浪士の快挙とか、中国革命との繋がりを感じていた。それは、総退学の時に保証人として先頭に立ったのは大角桂厳氏であったが、その直後から学生団に同情して新校設立に熱意を示してくれたのは日南・福本誠氏と支那革命の指導者支那浪人寺尾亨博士であった。福本氏は赤穂快挙の賛美者であって、著者ら学生らは 12 月 14 日の高輪泉岳寺の義士祭の行事にひっぱり出されて、鉢巻と木刀のかまえでヤアヤアとやったりさせられた。」と書かれてある。

高橋　琢也　1847. 12. 17〜1935. 1. 19：広島県出身。明治 3 年、大学南校教授。沖縄県知事、貴族院議員。学生後援会に加わり、全財産をなげうって東京医学専門学校の創立と運営のために奔走した。東京医科大学の開学の祖といわれる。

顧問のプロフィール

中浜東一郎　1857. 7. 7〜1937. 4. 11：中浜ジョン万次郎の嫡男。森鴎外、小池正直、賀古鶴所とともに東大医学部の同期卒業（明治 14 年）。ミュンヘン大学医学部衛生学教室（ペッテンコーフェル教授）に留学。緒方正規、森鴎外、小池正直らもペッテンコーフェル教授に師事している。日本衛生医学のパイオニア。東京牛込の回生病院や鎌倉病院の院長。脚気問題については中立であった。鴎外と日本公衆医事会を立ち上げ、一方では北里柴三郎とともに大日本医師会を立ち上げている。ジョン万次郎を救助した捕鯨船船長フェアフィールドの一族と親交があり、第二次大戦前にルーズベルト大統領が中浜東一郎に戦争回避のための手紙を送っている。学生団の後援会に大正 5 年 6 月の時点で参加している。また、東京医学講習所の開講にあたり、顧問となった。9 月 12 日の講義を参観し（中浜日記）、内科学教授を担当した。当時の学生は中浜の経営する回生病院で内科の研修を受けている。大正 7 年には回生病院を東京医学専門学校に売却している。

佐藤　　進　1845. 11. 25〜1921. 7. 26：水戸藩出身。ベルリン大学医学部卒業、同時に東洋人としては初めてのドクトル（博士）の称号を授与される。佐倉順天堂の佐藤泰然より始まる 3 代目の当主。茨城県人会学生は佐藤進を訪れ、学生支援を快諾する。しかし、順天堂の家訓により、東京医学専門学校の設立には参画せず、嗣子の達次郎を校長として派遣した。明治 22 年、外務大臣大隈重信が爆弾テロで重傷を負ったとき、佐藤の手術で一命をとりとめた。佐藤進が顧問になったことで、総理大臣大隈重信は開校を支援したようである。日清戦争の講和締結のために下関を訪れていた清国全権大使李鴻章が暴漢に襲われ負傷したさいにも佐藤進の治療により一命を取りとめた。

森　林太郎　1862. 1. 19～1922. 7. 9：津和野藩（島根県）出身。鴎外はペンネーム。東京医学専門学校開学の隠れた支援者であったと考えられる。

後援会（82 名、大正 5 年 6 月）

頭山　　満　1855. 4. 12～1944. 10. 5：福岡藩士の出。板垣退助の言論による社会改革に共鳴。玄洋社社長。孫文やボースを支援し、中国革命（辛亥革命）、インド独立などを支援した。大正 4 年にボースを英国の追跡からかくまった。ボースは東京で官憲から追われるが、ボースは頭山を頼る。頭山は隣に住む寺尾亨と連携してボースを赤坂の自宅から新宿中村屋へと移す。これが、ボースの神隠し事件であり、「中村屋のボース」[9] の始まりであった。学生後援会の発起人となった。

福本　　誠　前述

安部　磯雄　福岡藩士の出。同志社を経て米独に留学。早稲田大学教授で、大正デモクラシーの旗頭。早稲田大学野球部を創設。

秋虎　太郎　前述

高橋　琢也　前述

協賛者（167 名、大正 5 年 12 月 26 日まで）の名簿より

学界からは、**緒方正規、寺尾寿、大沢謙二、山極勝三郎、長井長義、林春雄、永井潛**、実業界からは**藤原銀次郎、大倉喜三郎、和田維四郎**、政界からは**原敬、犬養毅、高橋是清、後藤新平、鈴木貫太郎**らその後の日本を良い意味でリードした 167 名の方々が綺羅星の如く協賛者として加わっている。

緒方　正規　1854～1919：北里柴三郎と同じく、熊本県出身で熊本医学専門学校より東大に入る。北里より 3 年早く卒業。高木兼寛の脚気の食事原因説に対して、脚気細菌説をとなえ、学問的に対立する。これが発端となって、東大医学部派と高木、北里らとの対立が 20 年以上にわたって続く。森鴎外は東大での 1 年後輩であり、緒方を支持する。

東京医学専門学校

緒方知三郎　1883～1973：大阪適塾の創設者である緒方洪庵の孫。洪庵の息子、緒方惟準は東京陸軍病院病院長であったが、脚気の細菌説に反対し、石黒忠悳と対立して病院長を辞した。緒方惟準の息子であり東大病理学教授となった緒方知三郎が東京医学専門学校の初代の病理学教授を兼任した。緒方は佐藤達次郎校長の後をついで東京医学専門学校の校長を 3 期勤め、東京医学専門学校を東京医科大学へと昇格させるのに尽力した。退任記念誌「一筋の道」の中で、「大正 4 年の秋に日本医学専門学校の講師を兼任することになったが、学生に同情し、東京医学専門学校が設立されたのちも、ここで教壇にたつことを了承した」と書かれてある。脚気の原因は今ではビタミン B_1 の欠乏症であることは誰でも知っているが、このビタミン B_1（オリザニン）を発見したのが東大農学部の鈴木梅太郎である。緒方知三郎は脚気のビタミン B_1 欠乏兼中毒説を出し，島薗順次郎とともに帝国学士院賞を受賞した。

佐藤達次郎　1868.11.7～1959.7.8：佐藤進の嗣子。東京医学専門学校初代校長。東京医科大学の校歌（土井晩翠作，昭和 2 年）に「源流ふたつ，彼とこれ」の一節がある。この源流とは西洋医学と東洋医学のそれを示すが，我が国におけるこれらの系統は，佐藤泰然の佐倉順天堂と緒方洪庵の適塾によって代表される。奇しくも，東京医学専門学校には佐倉順天堂と適塾の流れをくむ佐藤達次郎と緒方知三郎が校長として赴任した。